

## 履歴現象

神戸大学経済経営研究所

教授 井川 一宏

馬齢を重ねると、組織のあり方に対する年配者としての意見を求められることが多くなる。そのたびに、年配者としての特別の意見をもっているとは意識していないのに、他人（特に若い人）から見るとそうなのかなと考え込む。確かに、過去の経験情報は多いであろう。しかしその中には役に立つもの立たぬものが混在している。

何かのショックで記憶喪失の状況になった場合、周りの状況に対してどのように考えるのか。何を基礎として思考するのか興味あるところである。アルツハイマーに自分がかかることは少し恐怖である。病気で無いとしても、過去を（特に近い過去も）かなり忘れやすくなっている。過去を振り返り将来を語る場合にしだいに不便を感じている。

過去に蓄積された情報には、自分の色（感情・意味）が付いたものと、一般的事実（他人が色付けしたもの）がある。当時は自分の色を大切にしていたが、いま年配者として意見を述べる場合、一般的事実を踏まえて考えをまとめることが多い。他人の色づけした事実を束ねる作業である。自分色は圧迫されていて、当然斬新なアイデアなど入らない。過去において、自分色で意見を述べて、一般的事実（意見）に敗れた歴史がそうさせるのである。この年齢になって、自分色を掲げてまた敗北するのが恥ずかしいのであろう。

日本人の生活は大きく変わってきている。農業を中心とした大家族制から、製造業を中心とした核家族制、情報・サービス業を中心とした個々人制に移ってきた。動かせないハード（土地）が中心であったものから、時間をかけて創設・分解・再建できるもの（会社）に、そして簡単にリチャッフルできるソフト（情報サービス）中心に変化してきている。ハード中心の社会では過去の経験情報の慎重な選別が活かされる状況は多いが、簡単にやり直しがきくソフト中心の社会ではどんどん新しいアイデアが試される状況が重視される。ハードな部分には年配者の意見が活かされるべきであろうが、ソフトの部分は特別にそれを意識する必要は無い。

大学は研究・教育のためのハード部分（図書資料・設備備品と組織システム）とソフト部分（研究・教育の行為・作業・業務）が混在している。ソフト部分は過去の履歴に影響される年配者の意見を重視しなくて良いが、ハード部分ではそれを活かすことも必要であろう。ソフトである研究・教育の内容が変化するのは当然であるが、それをサポートするハードである基礎資料・情報蓄積は、大きな変化に対応できるよう周到に用意される必要がある。教育の対象である学生は心を持ち技術を蓄積した体というハードの上に知識ソフトを追加する。ソフトを重視してハードを壊さないようにしなければならない。ハードに対する気配りには年配者の知恵が必要であるかもしれない。

神戸大学経済経営研究所附属政策研究リエゾンセンターは、元は経営分析文献センターとしてハードを担当するセンターであったが、現在はソフト部分の充実を加えてさらに新しく飛躍しようとしている。組織の歴史が長くなると過去に縛られる履歴現象の悪い面が目立ってくる。しかし過去を捨てると、記憶喪失やアルツハイマーの病の克服が必要となるかもしれない。誰かが言ったように、人間は過去の妄想のなかで現在を生きている。